

第VI章 総合考察

1. 確認種および重要種・外来種

(1) 確認種

1) 各分類群の確認種数

今回の自然環境調査で確認した各分類群の種数一覧を表VI-1-1に示した。

表VI-1-1 自然環境調査で確認した各分類群の種数

分類群	種数	備考
植物	1,093	
昆虫類	727	不明種除く 暫定値
クモ類	182	
鳥類	99	
哺乳類	5	不明ネズミ類1種含む
爬虫類	13	
両生類	7	
陸産貝類	25	不明種除く 暫定値
合計	2,151	

2) 他の区との比較

区内を対象とした自然環境調査は、今回は初めてであるため、確認種数の変化についての考察はできない。しかし、ほぼ同時期に行われた東京23区にあるいくつかの自治体による自然環境調査との比較は可能である。

表VI-1-2 23区内の他の自然環境調査結果との比較

分類群	練馬区 自然環境調査 平成24年3月	北区 自然環境調査 平成17～20年度 ^{*1}	杉並区 自然環境調査 報告書(第5次) 平成20年3月	港区 生物現況調査 (第2次) 平成22年3月
植物 ^{*2}	1,093	701	887	637
鳥類	99	83	50	80
昆虫類	727	343	1,106	610
クモ類	182	18	138	114
哺乳類	5	4	7	3
爬虫類	13	10	15 ^{*3}	9
両生類	7	6	6	3
陸産貝類	25	—	—	16
	2,151	1,165	2,209	1,472

^{*1}「北区の環境」平成20年10月より

植物:平成17～18年度

鳥類:平成18～19年度

昆虫・その他:平成19～20年度

^{*2}亜種、変種を含む。杉並区は品種も含む。

^{*3}比較のため亜種を含めない種数に修正した。

①植物

練馬区内では 1,093 種を確認した。北区の 701 種、杉並区の 887 種、港区の 637 種のいずれよりも多い種数であった。但し、港区は自然教育園や文献調査を除いた現地調査の結果である。植栽種と自生種の種数を集計している杉並区自然環境調査（第 5 次）と比較すると、練馬区の植栽種 387 種、自生種 706 種に対して杉並区ではそれぞれ 303 種、584 種で、いずれも練馬区で種数が多くなった。種数は、亜種、変種を含み、杉並区の場合は品種も含む。

都立石神井公園、都立光が丘公園のような樹林、草地、水辺など多様な環境を持ち保護された区域もあり、かつ規模も大きな公園や憩いの森、農地、河川などがあることが、周辺の区に比べて種数が多い要因となっていると考えられる。

②昆虫類

練馬区内では 727 種を確認し、343 種の北区、610 種の港区と比べると多いが、1,106 種の杉並区よりは少なかった。

北区や港区と比較すると、種数が多かった。練馬区では、種名まで確定できたもののみカウントしているため、同定レベルをそろえると、その差はさらに広がる。このことは、区内の昆虫相の豊かさを示した数値と考えられる。

一方、隣接する杉並区では確認種が 1,000 種を越えていた。これは第 4 次調査後から継続的に調査を実施していることや、他の調査の記録を文献調査として含めているためである。しかし、このことは、練馬区でも調査を継続し、調査労力を増やすことで、さらに確認種が増える可能性を示唆している。

③クモ類

練馬区内では 182 種を確認し、18 種の北区、138 種の杉並区、114 種の港区のいずれよりも明らかに多い種数であった。

クモ類は、現在分類などについて発展中の分類群であり、専門の調査員も十分にはいない。また、北区の様に昆虫類の補足調査として行われる場合もある。今回、練馬区では調査地は限定したものの、クモ類専門の調査員により、一定の労力をかけて現地調査を行ったことで、このような結果になったと考えられる。

④鳥類

練馬区内では 99 種を確認し、83 種の北区、50 種の杉並区、80 種の港区のいずれよりも多い種数であった。

今回の練馬区の自然環境調査では、定期的な調査の他に、他の分類群の調査や、任意調査を積極的に行った。また、光が丘公園のバードサンクチュアリでの記録も含めたことから、このような結果になったと考えられる。

しかし、それらを勘案しても、23 区内での練馬区の鳥類相の豊かさを示した数値であると考えられる。

⑤哺乳類

練馬区内では 5 種を確認し、4 種の北区、3 種の港区よりも多く、7 種の杉並区よりは少なかった。

すでに 23 区内では哺乳類相は貧弱になっており、差異は見出しにくいと考えられる。

⑥爬虫類

練馬区内では13種を確認し、10種の北区、9種の港区と同等か多く、15種の杉並区よりは少なかった。

隣接する杉並区では善福寺池の外来カメ種やヘビ類の記録が多かった。区内でも現地調査では記録できなかったものの、文献ではこれらの外来カメ類が記録されており、実際には同様の種数が生息していると考えられる。

⑦両生類

練馬区内では7種を確認し、6種の北区、6種の杉並区、3種の港区と比較すると、同程度か、多い種数であった。

練馬区と同様に、杉並区、港区でも国内移入種が含まれており（北区：杉並区：ツチガエル、港区：トウキョウダルマガエル）、種数をそのまま両生類相の比較に用いることには注意が必要である。

⑧陸産貝類

練馬区内では25種を確認し、港区では16種、北区、杉並区では調査をしていなかった。

港区のように特別に土壌動物の調査を行ったわけではないが、練馬区では港区よりも多く確認された。今後、専門の調査員による現地調査を行うことで、さらに種数が増えることも予想され、23区内での練馬区の陸産貝類の多様性が示唆される。

(2) 重要種

1) 重要種の種数

各分類群の調査により把握された重要種（国RL・都RL掲載種）を表VI-1-3～4に示した。なお、ここでの「掲載種」には、「データなし」や「非分布」としての掲載も含めている。

国RL掲載種16種であり、植物8種、鳥類6種、昆虫類1種、クモ類1種であった。カテゴリ一別では、絶滅危惧Ⅱ類（VU）が6種（植物3種、鳥類3種）、準絶滅危惧（NT）が9種（植物5種、鳥類2種、昆虫類1種、クモ類1種）、情報不足が1種（鳥類1種）であった。

都RL掲載種は、146種であり、植物46種、鳥類40種、昆虫類40種、クモ類3種、哺乳類1種、爬虫類8種、両生類6種、陸産貝類2種であった（表VI-1-4）。

表VI-1-3 確認種のうち国RL掲載種に該当する種

分類群	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	情報不足 (DD)
植物	ミズキンバイ ヒメミクリ キンラン	マツバラン カワヂシャ カキツバタ ナガエミクリ タシロラン	
昆虫類		エサキアメンボ	
クモ類		キシノウエトタテグモ	
鳥類	サンバ ハヤブサ コアジサシ	オオタカ ハイタカ	オシドリ
合計	6	9	1

※哺乳類、爬虫類、両生類、陸産貝類は該当種なし

表VI-1-4 確認種のうち都RL掲載種に該当する種 (1/2)

分類群	絶滅 EX	絶滅危惧 I A類 CR	絶滅危惧 I B類 EN	絶滅危惧I類 CR+EN	絶滅危惧 II 類 VU
植物	ミズオトギリ ミゾハコベ ミズキンバイ フタバムグラ ミズハコベ	タチクラマゴケ ナツノハナワラビ ハリガネワラビ ハンゲショウ ヤマブキソウ ミツガシワ	ホソバナライシダ イカリソウ カキツバタ	—	アスカイノデ ハンノキ コウホネ ウマノスズクサ タンキリマメ ゴキヅル シロネ カタクリ ワニグチソウ キツネノカミソリ ショウブ コマツカサススキ ギンラン キンラン
昆虫類	—	オオアメンボ ウバタマムシ	キイトンボ アオヤンマ ヨツボシトンボ ヒメトラハナムグリ クロカナブン	オナガアゲハ	ハグロトンボ シオヤトンボ ミヤマアカネ ショウリョウ バッタモドキ キンボシハネカクシ ヒラタクワガタ キスジトラカミキリ センノカミキリ オオミズアオ
クモ類	—	—	—	—	キシノウエ トタテグモ
鳥類	コサメビタキ サンコウチョウ	ササゴイ オオタカ ツミ ツルシギ アオバズク	オシドリ ミコアイサ ハイタカ ノスリ ハヤブサ チョウゲンボウ クサシギ コアジサシ アオゲラ	—	ダイサギ コサギ バン オオバン コチドリ イソシギ ヤマシギ カワセミ セグロセキレイ モズ トラツグミ オオヨシキリ ヤマガラ ベニマシコ
哺乳類	—	—	—	—	—
爬虫類	—	—	ニホンイシガメ	ニホンスッポン ニホントカゲ	ニホンヤモリ ニホンカナヘビ ヒバカリ
両生類	—	トウキョウ ダルマガエル シュレーゲル アオガエル	ニホンアマガエル ニホンアカガエル	—	—
陸産貝類	—	—	—	—	—
合計	7	15	19	3	41

表VI-1-4 確認種のうち都RL掲載種に該当する種 (2/2)

分類群	準絶滅危惧 NT	情報不足 DD	留意種	データなし	非分布	合計
植物	オノエヤナギ ニリンソウ ヘラオモダカ マコモ ナガエミクリ ヤガミスゲ アオガヤツリ ウキヤガラ	イワヒメワラビ クモノスンダ コモチンダ ハシゴシダ ヒメミクリ	—	マツバラ セイタカハリイ	コシダ ハリコウガイ ゼキショウ ヌマガヤ	46
昆虫類	オニヤンマ チョウトンボ マイコアカネ リスアカネ ヒグラシ シマアメンボ コハンミョウ ノギリクワガタ ヤマトタムシ ノギリカミキリ タケトラカミキリ	ヒゲシロスズ ヤチスズ タンボコオロギ キンヒバリ シブイロカヤクリ ツマグロバツタ エサキアメンボ ハッカハムシ ミドリシジミ イチモンジチョウ	ミズイロ オナガシジミ コムラサキ	—	—	40
クモ類	—	—	—	トゲグモ ゴマジロオニグモ	—	3
鳥類	カイツブリ トビ アカエリ ヒレアシシギ クロジ イカル	クイナ	スズガモ	—	サシバ ミソサザイ エナガ	40
哺乳類	—	—	アズマモグラ	—	—	1
爬虫類	アオダイショウ	クサガメ	—	—	—	8
両生類	アズマヒキガエル	—	—	ヤマアカガエル	—	6
陸産貝類	コオオベソ マイマイ類の一種	—	—	スナガイ	—	2
合計	26	17	4	6	6	146

2) 重要種の割合

各分類群の確認種数に対して、重要種の割合を表VI-1-5に示した。

表VI-1-5 確認種中の重要種の割合

分類群	確認種	重要種	割合(%)	備考
植物	1,093	48	4.4	自生種706種類に対しては6.8%
昆虫類	727	40	5.5	
クモ類	182	3	1.6	
鳥類	99	40	40.4	
哺乳類	5	1	20.0	
爬虫類	13	8	61.5	
両生類	7	6	85.7	
陸産貝類	25	2	8.0	
合計	2,151	148	6.9	

重要種の割合をみると、両生類が85.7%、爬虫類が61.5%と非常に高い割合になっている。ともに国内移入種が含まれるという問題があるものの、分類群全体として、生息状況が不安定であることが伺える。

ついで鳥類の40.4%が重要種であった。この中には、絶滅(EX)というカテゴリーになっている種が2種(コサメビタキ、サンコウチョウ)含まれているなど、比較的高いカテゴリーの種が多いが、多くが渡りの移動途中に立ち寄る種であり、実際の生息状況とは乖離があると考えられる。

植物については、確認種数が多いため、割合としては低いが、絶滅(EX)を8種、非分布を3種確認するなど、現地調査を行ったために自生が明らかになったことは特記すべきことである。

昆虫類については、確認種数が多いために、割合が過小評価になる恐れがある。絶対数では40種が重要種であり、その中に移動途中などの偶発的な確認もほとんどないと思われることから、重要種への注意が必要な分類群といえる。

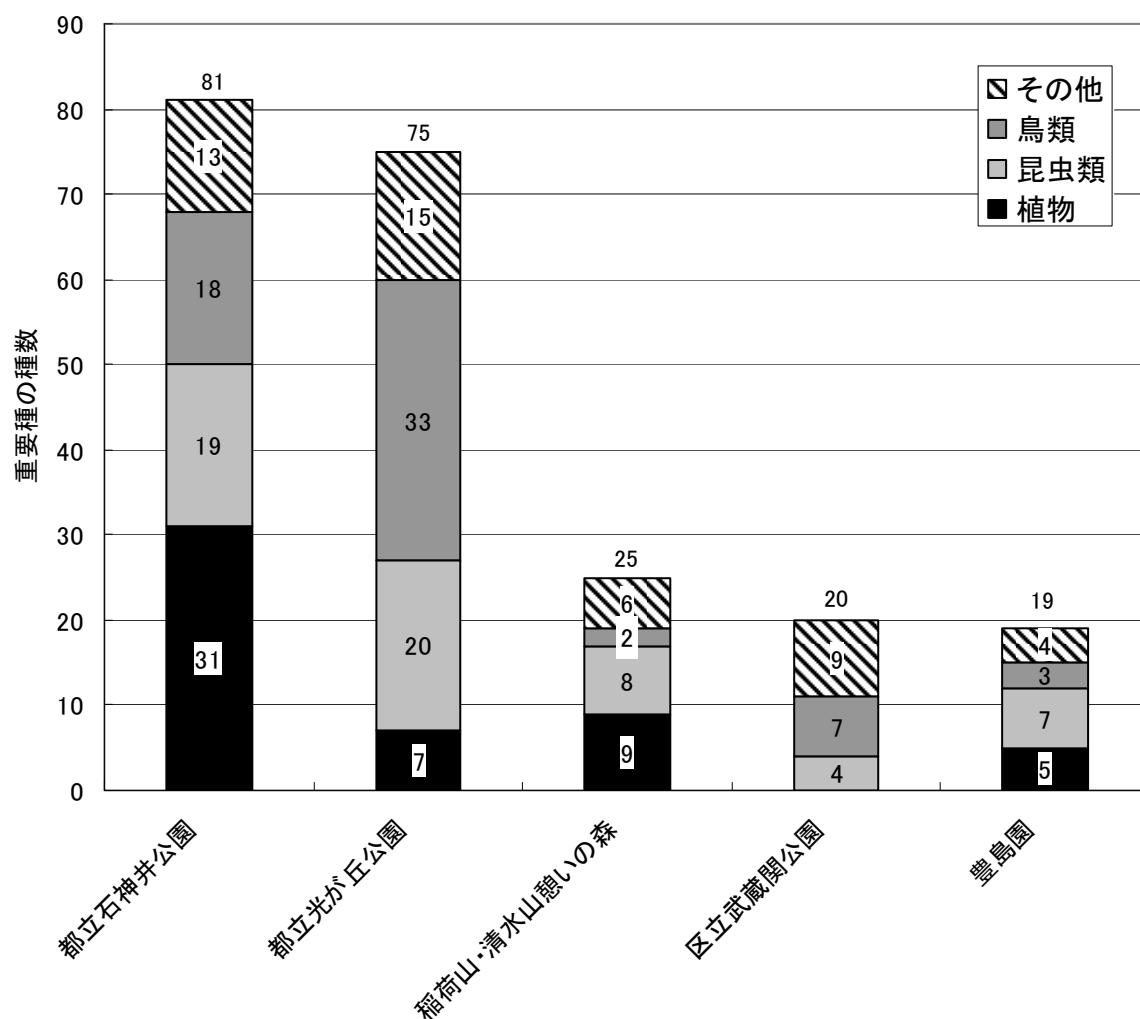
クモ類については、都RL掲載種がやや少ないこと、陸産貝類については、調査そのものが十分でないことから、ここでの評価が困難と考える。今後の調査などの情報も含めて判断すべきと考える。

3) 各調査地の重要種種数

各調査地における重要種の確認のべ種数を、図VI-1-1に示した。

都立石神井公園で81種、都立光が丘公園で75種と非常に多くの重要種を確認した。これらと比較するとやや少ないものの、稲荷山・清水山憩いの森で25種、区立武蔵関公園で20種、豊島園で19種と続いた。

都立光が丘公園や都立石神井公園が区内でも特に重要な場所であることは、これまでも定性的には示されているが、今回の調査で数値としても明らかになったといえる。また、それに準ずる3箇所も、区内では重要な場所として位置づけられると考えられる。



図VI-1-1 重要種の確認種数合計が上位5箇所の比較

(3) 外来種

各分類群の確認種から外来種と考えられる種を抽出した。これを表VI-1-6に示した。植物については、外来種の種数が多いため、特定外来生物以外は主な種と種数のみを記載した。植物の要注外来生物、国外外来種、国内外来種は多数あるため、巻末の資料-3で把握できるようにした。

全体では、特定外来生物を7種、要注外来生物を41種、確認した。

表VI-1-6 各分類群で確認した外来種の一覧

分類群	特定外来生物	要注外来生物	その他の国外外来種	国内外来種と考えられる種※
植物	アレチウリ オオフサモ オオカワヂシャ オオキンケイギク ミズヒマワリ オオハンゴンソウ	エゾノギシギシ トウネズミモチ ハルジオン セイタカアワダチソウ ノハカタカラクサ など 36種	ヒマラヤスギ ヒメツルソバ ナガバギシギシ オランダミナグサ シュウカイドウ など 224種	イヌカタヒバ ソテツ スギ ソメイヨシノ アシタバ など 313種
昆虫類	—	アカボシゴマダラ	クロゴキブリ アオマツムシ プラタナスグンバイ アワダチソウグンバイ ヨコヅナサシガメ キマダラカメムシ コルリアトキリゴミムシ クモガタテントウ ラミーカミキリ ブタクサハムシ セイヨウミツバチ アメリカミズアブ スイセンハナアブ	スズムシ
クモ類	—	—	—	—
鳥類	—	—	ドバト ホンセイインコ インコ類の一種 コクチョウ	—
哺乳類	—	—	ハクビシン	—
爬虫類	—	ミシシッピチズガメ ニセチズガメ ミシシッピアカミミガメ ワニガメ	—	ミナミイシガメ
両生類	ウシガエル	—	—	ヤマアカガエル トウキョウダルマガエル シュレーゲルアオガエル
陸産貝類	—	—	トクサオカチョウジ コハクガイ チャコウラナメクジ ノハラナメクジ オナジマイマイ	アズキガイ
合計	7	41	247	319

※植物は栽培種も含めた。

2. 環境類型ごとのまとめ

第IV章では植物相、植生調査結果をもとに調査地選定時の環境区分（第III章参照）を再区分し、環境類型ごとにまとめた（表IV-1-13）。

本章ではさらに、環境類型とそこに生息・生育する動植物の特徴を把握するための情報整理を行った。

それぞれの環境類型の図（図VI-2-1～図VI-2-10）は調査地をもとに生息環境とそこに生息・生育する代表的な動植物をまとめたイメージ図である。